

やまとうた再び





采女の袖吹き返す明日香風都を遠みいたづらに吹く

朱鳥九年の冬、持統天皇は冷たい風の強い日に遷都した。遷都といっても明日香の宮と目と鼻の先なのだが。現在藤原京と呼ばれているところである。しかし当時の資料には藤原京という文字はない。その名称は近代になって歴史家がつけた名称なのだ。新しく益したという意味で新益の京と書かれている。明日香浄御原宮に新に足したという意味合いである。持統天皇は浄御原宮を尊重し殊更にその事にこだわったのだろう。

この歌は志貴皇子の歌である。志貴皇子は天智天皇の皇子で、壬申の戦の後に天武天皇に自身の皇子と同じように大切にされ、後には平安朝の天皇の血筋の祖となった人である。歌に秀でていて多くの有名な歌を残している歌人でもある。皇子を悲劇の皇子のように言うものがあるが、果たしてそうだったろうか。時代が下って平城京の頃にも都の外れでひっそりと暮らしていたということだが、それは皇子の性格のように思える。皆がみな政治権力の舞台にいることを望むものでもあるまい。

藤原京はこの国における最初の本格的な都城であった。周礼に基づいた方形の都で以降の平城京や平安京よりも大きなものだった。ところが、何故か短期間で放棄されてしまった。その真意は今もって謎のままではあるが、しかし、少なくとも建設当初、この国はこの京に狂喜したはずである。人々が否定的であったとは考え難い。改めて皇子の歌はどんな気持ちを歌ったものなのだろうか、気になるところだ。



春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香久山

春過ぎて夏来るらし白妙の衣干したり天の香久山

持統天皇御製のこの歌は何故か二通りが伝わっている。先のは小倉百人一首にある、藤原定家の選じたものである。新古今集に載るこの歌は、当時にはすでにこの様に伝わっていたものなのだろうか。あるいは何者かによってこの様な歌になったものなのか。後者の歌はその元の歌として万葉集にあるものだ。何故に別に伝わっているのだろうか。そこにも疑問が残るが、万葉集には歌のあとに、あるは、とか不確定なものとして似たような歌を列記している場合が多い。この歌もその様に確定しない二つの歌なのだろう。また、万葉仮名で書かれた歌はすぐに人々には読めないものになっていった。したがってその解釈読み方も違うものが存在するという事もある。

持統天皇自身の歌がいずれのものであるかということに、芸術性というものでない歌本来の姿であるところの生身の歌というものがあるし、それはまた本人と歴史を知るという意味で大事なものであるとも思うのだが。



淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのにいにしへ思ほゆ

言うまでもなく歌聖柿本人麻呂の有名な歌である。人麻呂は主に持統朝、文武朝に活躍していた。この歌は持統大上天皇が淡海を行幸した折りの歌である。古とは、天智天皇が遷都した淡海の大津宮の時代のことで、そこを訪れた人麻呂がその頃を回想しているのである。心もしのにとは、死にそうになるくらいの意味で、夕波千鳥と相まって哀しみが深く染みてくる。壬申の戦によって壊滅した都は廃墟となっていたに違いない。

持統大上天皇の目にはどのようにに映ったのだろうか。大上天皇は天智天皇の皇女であって、尚且つその弟皇子の大海人皇子の後だった。謂わば父と夫の争いなのである。過酷な状態なのだ。このような時代にあっては自身の信念に従うより仕方がないように思うが。そして最後には、この様に寂しさだけが残ってしまうのである。歴史の哀感とは何時もこの様なものなのだろう。過ぎ去った人々の生き様に自然が美しく映るのである。



あしひきの山のしづくに妹待つと我立ち濡れぬ山のしづくに

吾れを待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくにならましものを

大津皇子と石川朗女の相聞歌である。この石川朗女という人は万葉集にいくつかの歌を残しているが、その正体が不明で、その都度の歌で何人かの別々の人物であるらしい。正式な名前ではなく、石川のお嬢さんという意味合いだったと言われている。この大津皇子と恋愛関係にあったのは、大津皇子の宮に使えていた人で、草壁皇子とも恋愛関係を持っていたと考えられている。その真意は別として、実際、大津皇子とこの様な歌を取り交わす仲だったのである。それにしても、大津皇子に使えていた人が何故に、山などで待ち合わせなければならなかったのか、疑問であるが、皇太子である草壁皇子という立場の人が絡んでいるのであれば、複雑になっても不思議ではない。

それにしても、何千年も前の歌という感じがまったくしない。現代人の詩的な感覚を感じるのは私だけではないだろう。私達は何千年もの長い間ちっとも前進などしてはいなかったのではないか。

その様に、私達が思っているほどいにしえは遠くはないのかもしれない。



石はしる垂水の上の早蕨の萌えいづる春になりけるかも

志貴皇子の歌った春の歌の代表的なものである。春先に若菜を摘むのが年中行事として行われていた。主に女達のやることではあるが、男がしないということではない。天皇ですらしたこともあった。蕨などはその代表的な山菜であったことだろう。また、薬狩りといって女は薬草を集め、男は鹿を狩り、その袋角を採集した。そんな国家行事もあった。それには天皇をはじめ公卿大臣も参加した大事な行事であったようだ。そんな事は部下に命じたら良からうと思うだろうが、あえてすることで、そのものに敬意を表すとともに恵みに感謝する意味合いを持っていたのだろう。また行楽的な楽しみでもあったのに違いない。

今思ったのだが、蕨は山菜でも少し遅れて出てくる。春一番に出てくるのはコゴミである。まだ雪の残る内にも芽を出すものだ。ならばこの早蕨とはコゴミのことではないだろうか。昔はあえて細かく個別な種の名前を付けず、羊歯類の芽で、開く前のくるくる巻いた状態のものは全て蕨と呼んだものと思われる。現代はちょっと色や形が違うだけで、違う種類として、学術的なものの取り方をして、あたかもそれが知的で教養深げに思っているが、そんなことなど一般人にとってどうでも良いことではないか。大切なはそのもの自体であるはずなのだから。現代人はそんな煩さなものに拘るあまり本質を忘れ、この歌のような大切なものを見失ってしまったようだ。

1



わが岡のお神に言いてふらしめし雪の催しそこにちりけむ

五百重朗女が天武天皇の戯れ歌に応えた歌である。天武天皇の夫人である五百重朗女は、藤原鎌足の娘であって、名前の五百重とはそれだけの衣に包まれて大事にされたという意味である。また、藤原不比等の同母の妹であり、母は額田王の姉の鏡王女であった。

この時に先に天武天皇が戯れで送った歌とはこれである。

わが里に大雪ふれり大原の古りにし里にふらまくは後

ここで言うわが里とは、当時の都であった明日香浄御原宮で、大原の古い里とは明日香の東の山際の辺りの事である。ここが藤原氏の発祥地であるとされる所で、朗女はそこで暮らしていたのだろう。従ってその岡のお神とは藤原氏の祖先に当たるものを指すに違いない。

天皇が都に大雪が降ったので、すぐ近くにいる朗女に、戯れで、もうすぐそっちでも降るだろうと言ってるのに対して、朗女はこっちが先で、その欠片がそっちに降ったんでしょと返したのである。まったく大胆不敵な歌なのだ。後の時代の藤原氏の専横を先どって感じさせはするが、それはその後の歴史を知る我々の感覚であって、実際はそうとも言えまい。おそらく天皇と朗女は相当な年の差があったことだろう。当時では親子以上かもしれない。この歌のやり取りでそ

の事が分かる。絶対権力者であった天武天皇にこの様な態度をとれたのは皇女達以外にはいなかったはずだ。五百重朗女は妃ではあるが天皇に取っては皇女と同じ立場だったに違いない。だからこの様なことにも却って天皇は喜んだに違いないのだ。



吾背子が古家の里の明日香には千鳥鳴くなり島待ちかねて

長屋王の故郷の歌ということだが、万葉集には、右は今案ふるに、明日香より藤原宮に遷りましし後、この歌を作れるか。と注釈がついている。この本の最初に書いた志貴皇子の明日香風の歌と同じ頃の歌であるのだ。

長屋王といえは後の奈良時代に、讒言によって一家滅亡に追い込まれる悲劇の皇族である。平城の都で藤原不比等無き時代の最高位の人であった。教養と才能と人望のあった王は、この時代の最先端の豊かな生活を営み、富や名誉に溢れていた。また、王は高市皇子の王子で母は元明天皇の姉の御名部皇女である。文武天皇とは同年代の従兄弟にあたる。その上、文武天皇元正天皇の妹皇女の吉備皇女をめぐって、奈良朝の天皇家とは最も繋がり深い存在であった。したがって、藤原氏にとっては脅威の存在であったのである。

しかしこの歌の頃はまだ若く地位も高いものではなかった。なので、史実にもあまり登場してはいない。もっとも、傍観者である後の世の人々から見ての史実など、王の人生にはなんの関係もないことで、王はそれなりの充実した人生を送っていたはずである。知性と教養のある青年皇族の華やかな生活は想像することしかできないが、前途に希望を感じていたに違いない。がしかし、この歌もまた、志貴皇子の歌と同様に明日香を恋しく思っているのである。藤原京の暮らしが良いものではなかったのだろうか。そうとは思えないが、おそらくは慣れない藤原京の暮らしからみれば明日香京の暮らしが最良のものだったのかもしれない。確かにこの時代の変遷は目まぐるしく、革新的な希望に満ちてはいただろうが、付いていくのに大変だったやもしれず、その様な思いが保守的な平安を望むのは世の常であるらしい。

瀧の上の三船の山に



瀧の上の三船の山にいる雲の常にあらむとわが思はなくに

弓削皇子、吉野に遊びましし時の御歌一首。吉野は以前から朝廷と関係が深く、古くから離宮があって、歴代の天皇が度々行幸している場所である。中でも、持統天皇は何度も行幸を繰り返していて、その回数は異常なほどである。壬申の戦の頃、夫の天武天皇や家族と共に隠棲して暮らしたところであって、そんなにも吉野を訪れたのはその頃を思っただけの事からであろうし、加えて子供の頃に姉弟や祖母帝斉明天皇と暮らした特別な場所であったからだと思われる。

この弓削皇子の歌はいずれかの行幸に従駕した折りの歌であろう。現在この頃の吉野離宮はどこであったか確定はしていないようだが、宮瀧にあったとするのが有力である。宮瀧の上には象山と三船山が聳えている。この歌は三船の山の上をいく雲を見て、嘗ての吉野についての思いを重ね無常感を歌ったものであろう。弓削皇子は天武天皇の末の皇子で、以前に父帝達が暮らした吉野を知るよしもなかった。

春日王の和へまつれる歌一首

王は千歳にまさむ白雲も三船の山に絶ゆる日もあらめや

春日王は、山の上の雲はいつか消えてしまうでしょうが、弓削皇子の境遇は磐石でそんな雲よりも末長く栄えるでしょうと歌っている。この返歌があることから先の弓削皇子の歌が自身の身の短いことを歌った歌ととられる根拠となって、そこから皇子の境遇の悲劇性を語るものがあるが、私はそうは思わない。やはりかつての吉野に対する憧憬であろうと思う。

或本の歌一首

み吉野の三船の山に立つ雲の常にあらむとわが思はなくに

右の一首は、柿本朝臣人麻呂の歌集に出でたり。

人麻呂の歌は本歌取りどころか弓削皇子とそっくりで、いずれも有名な歌詠みが盗作などするはずもなく、後世にどこかで勘違いされて伝わったものであろう。古今集選者の紀貫之がこの歌

を批評しているが、それは人麻呂の歌としてである。